第十一回ふくふく童話大賞「大賞」

砂漠にて

年老いたライオンのマルジョーンは大きな岩かげにぐったりとよこたわっていた。ぼろぼろの縄のようになったたてがみに羽虫がうるさくむらがっている。太陽が重い石をのせたようにじりじりとマルジョーンを焼いていた。もう歩くこともできない。だがマルジョーンは時々何かを待ってでもいるように、頭をあげてあたりを見回した。ごつごつした岩山の向こうには赤茶けた砂漠が果てしなく広がっているばかりだ。熱風が運んでくるのは砂ぼこりと火薬の匂いだけだった。

世界は死んでしまったのか。マルジョーンはため息をついた。

その時、空気がかすかにゆれ、マルジョーンの耳がぴくりと動いた。人間だ！　マルジョーンはむっくりと起き上がった。

黄色い土ぼこりのなかから、ぼろ布をまきつけた棒のような男の子があらわれた。ターバンと服のすそを風にはためかせ、小さな袋をひとつかついでいる。

男の子はマルジョーンの側まで来ると、大きな目を見開いて、少しも驚いたふうもなく言った。

「ライオンだ。やっと会えた。だれかにとても会いたかったんだ」

少年の目は澄み切っていた。

「ライオン、どこか苦しいのですか」

マルジョーンの胸にその言葉がしみこんでいった。
「ただ年をとっているだけだよ」
マルジョーンはしげしげと少年を見た。
「ボーイ。きみはどこから来たんだ。どこに行くのだね」
「平和な遠い国に行くんだ。村の人たちはみんないなくなってしまった。ライオン、あなたもどこかに行くところですか」
「おれはマルジョーンだ。ずっとここでくらしてきたんだ。どこにも行かない」
「マルジョーン！　立派な名前ですね。ぼくはアルベローニ、十二才です」

「アルベローニか。かしこそうでどうどうとした名前じゃないか」
「アルベローニって、高い木という意味なんです。ずっと歩いてきたからとても疲れた。ここで休むことにするよ」
アルベローニはひざまずいて頭を地面にすりつけて祈りまた立ち上がって祈った。そして岩かげに膝をだいて座ったかと思うと、すぐにぐったりと目を閉じた。汚れたほおにまつげが影を落としている。十二才だって？　まるで五、六才のちいささではないか。たったひとりでこんな砂漠を歩いてきたんだ。どんなに恐ろしいことを見てきたことだろう。マルジョーンはアルベローニの血のにじんだはだしの足をなめてやった。
マルジョーンは思い出した。むかし子供たちにもこうしてやったも

のだ。ついきのうのことのようだ。ここはみどりの草原だった。きらkらと綿毛の飛ぶ風のなかをかけまわっていた愛しいおれの家族たち。仲間たち。一面のむらさきのチコリの花。カスピアの花。水の流れ。なにもかもなくなってしまった。

しかし、このアルベローニがあらわれた。

世界はまだ生きていたのだ。マルジョーンはアルベローニの小さな寝顔を見つめ続けた。

雲の影が砂漠をゆっくりと移動して夕暮れになった。アルベローニは目をさました。

「だれかのそばで寝たのは久しぶりだよ」

アルベローニはさっきのように頭を地面にすりつけて祈りまた立ち上がって祈った。それから袋からかちかちになったパンのかたまりを取り出すと、マルジョーンに差し出した。マルジョーンはもう何も食べられなかった。アルベローニもひと口ふた口かじっただけだった。とても弱っていることがわかった。とつぜん遠くの空で赤い光がなんどもさくれつした。アルベローニは飛び上がるとマルジョーンに抱きついた。

「まだ、やまないんだね」

「ああ、いつまで続くのだろう」

マルジョーンはふるえているアルベローニを自分の子供のようにお腹のなかにつつんでやった。

「さっきは何を祈っていたのか」
「あなたに会えたことを感謝したのです。それから早く戦いがおわりますようにと」
「おれは祈ったことなどない。ライオンは生まれ、ただ死んでいくだけだからな」
アルベローニは袋からぼろぼろになったものを取り出して、そっとなでた。
「マルジョーン、これは聖なる本だよ。人間にとって一番大切なことが書かれているんだ。父さんはいつもこの本を読みながら祈っていたんだ。ぼくもかならず読めるようになるよ」

祈りとはそんなにいいものなんだろうか、とマルジョーンは思った。
今度はアルベローニは袋から小さな包みを取り出した。
「これはユーカリの種だよ。ぼくの村にはこの木がいっぱい茂っていたんだ。ユーカリの木陰で、弟と遊んだ。母さんが　をうたってくれた」
「みんなはどうしたんだ」
アルベローニの目が　ら　らした。
「　された。弟もだ。でもぼくは死なない。　が読めるようになって人間にとって一番大切なものを　りたいんだ。それからユーカリの　をつくりたいんだ」
アルベローニは続けた。

「マルジョーン、ぼくは遠い国に行ったら　　するよ。ともだちもたくさんできるだろうな」
「行けるといいだろうね」
「かならず行くよ。でもここを出ていっても、いつか　ずかえってくるよ。そしてね、ぼくの村をもとのようにユーカリの木でいっぱいの平和な村にするんだ。ぼくはアルベローニ、高い木だからね」
　マルジョーンは胸がつぶれるようだった。遠い国にこの子は行き　くことができるだろうか。この子はとても弱っている。このままでは生きている間に　けるはずがない。
「アルベローニ。おれの　　に　りな。いますぐだ。みんなのところ

に　っていこう」

前に国　をめざして行った人々のところに　れて行こうとマルジョーンは思った。歩こうなんて　い間　えたこともなかったマルジョーンはアルベローニを　　に　せると　をふりしぼって立ち上がった。アルベローニは羽でも　せたように　かった。足を　み出した。おお、歩ける。マルジョーンは一歩一歩　　の　をこめて　んだ。

はやく、はやく。マルジョーンの気　ちは　った。

砂漠に大きな黄色い　がのぼってきた。砂漠は　の光に　たされて、一色になり、　気があたりを包んだ。

小さなアルベローニはマルジョーンの　に頭を　せた。もう　をた

てていることも出来なくなっていた。
「　よ。あなたの　をこの子にそそいでください」
マルジョーンははじめて　に祈った。
の砂漠を少年を　せたライオンの影がひたひたと　んだ。
「マルジョーン、　かだね。何もこわいことなんかないようだよ。ぼくは、　ず　ってくるからね」
「そうだ、アルベローニ。　ず遠い国にいくんだ。大きくなって　ってくるんだ」
が　けてきた。地平　から赤い太陽が　り、砂漠を　めだした。
「ここまでだ。もうこの　は国　だ」

岩からの　くとおおぜいの人々が　い　のようにうずくまっていた。
を　った　たちが行く　にたちふさがっている。国　を　えさせないためだ。何も　らないマルジョーンはアルベローニに言った。
「お　れだ。さあ、行くんだ」
アルベローニはマルジョーンの　を抱いた。
「きっと、　ってくるよ。待っていてね」
よろよろと歩いていくアルベローニをマルジョーンは見　った。
あそこを　えれば平和な国に行けるんだ、アルベローニははうようにんだ。
「待て、ここに　るな！」

ひとりの　がアルベロー二を　き飛ばした。その　間、黄　の光のようにマルジョーンが飛び出してきた。

「ライオンだ！」

が　をかまえた。

アルベローニが　んだ。

「たないで！　ぼくを　けてくれたんだ」

アルベローニの　はかきけされた。

「バーン」

が一　った。

「さないでーーー。もう、　されるのはいやだよーー」

アルベローニが　　をあげながら、マルジョーンに向かって　った。
「子どもを　めろ！」
続けて　　がとどろいた。マルジョーンとアルベローニが　にとんだ。
マルジョーンは一　のうちに　を見た。
「ユーカリの　だ。　の風のなかをアルベローニが歩いてくる。あの本を　って　っている。もう　えるようになったのだな。アルベローニ、えは見　かったかい。人間にとって一番大切なものは何だったのかわかったのかい」
マルジョーンはまぼろしのなかのアルベローニに　りかけた。
どさりと　げ出された一頭の大きなライオンのそばに小さな少年が

よりそっていた。少年は　顔だった。一　の　　のぼろぼろの本と
い種が　々とこぼれおちていた。
疲れきって　を　くしたような人々がその光　を　　と見ていた。

もりおみずき